

## ドイツの幼稚園に見る保育環境に関する一考察

鳴原 晶子（東京教育専門学校）

はじめに

世界で始めて幼稚園を創設したフレーベルがドイツ人だったから…、ではないが、色々な経緯を通して筆者とドイツの関わりがいつの間にか深くなっている。シュタイナー教育との出会いに始まり、Dusseldorf 日本人幼稚園での2年間の勤務とその後現地の幼稚園での2ヶ月間の実習。ドイツ研修およびホームステイ体験など。ドイツ人の気質や生活、文化、歴史も興味深いものである。

### [1] 研究の目的・方法

本研究の目的は、「保育環境」を理解した上で現在日本の幼稚園で展開されている保育を見直すことである。子ども達の健全な成長発達のために保育者は子どもをどう捉えて、保育に携わるべきか、日々の保育を展開するべきかについて、ドイツの幼稚園から学んだことを含めて考察する。

方法は日独の幼稚園訪問などの実地調査を中心としている。

### [2] 結果および考察

#### 1. Meerbusch, Evg. KG

1985年8～9月の2ヶ月間、Meerbusch市にあるEvg. KGで実習をした。当初はドイツの幼稚園、特に日本人をはじめ外国人を受け入れている幼稚園の保育の実際を見学し理解する、程度の目的で臨んだのだが、実際に入ってみたところ、見学期間は2日間のみで、以後は助手的な立場で子ども達と関わり、行事に参加することもあった。「～先生」といった呼び方はしない。「Frau～」とか「Fraulain～」と子ども達は呼んでいた。先生方は子ども達のことをファーストネームで呼ぶ。実習を開始して間もなく気付いたことは、保育室の棚にカードゲームなどのおもちゃがたくさんあること、そして先生方が日本の保育者達のように園庭で走り回って子ども達と遊ぶ姿が見られない、ということであった。驚いたことは子どもが音楽教室や水泳教室に行くと11時すぎに登園しても保育者はなにもいわない。幼稚園ではそういうことを特別に教えないから習得したいのであれば専門に教える所で学んでください、ということなのである。

ドイツは州によって法律や条例が違う。従って保育者養成の方法、期間も若干違う。同時に個人主義という風潮もあってか先生方の仕事に対する考えもいろいろであった。日本人も含めて、数カ国の外国の子ども達が在籍していたし、筆者の他にイタリア人の実習生がいたのだが、我々を受け入れてはくれるものの日本語で話してみようなどといった迎合は全く見られなかった。ただこちらが心を込めて接すれば毎日暖かく迎えて下さったし、時には食事をご一緒することもあった。

保育室におもちゃが多いのは子ども達と保育者との直接的な関わりが日本とくらべて濃くないことが考えられた。一人一人が取り組むゲーム的なものがたくさん積んであり、筆者もその中のいくつかで遊ばせてもらった。子どもが自分の意志でおもちゃを選び、取り組むことや使ったものの片づけも徹底されていた。ただし、これはこの園のことであって17年前のこととはいえ、ドイツのどこの幼稚園も同様であったとはいえない。この幼稚園で学んだことは、信頼関係の大切さである。保育者同士、保育者と子ども、保育者と保護者などそれぞれの関係が信頼、という絆で結ばれていたからこそ、日々の保育がスムーズに展開されていたのだろうと思うのである。

#### 2. 東西ドイツ統一後

1989年に東西ドイツは統一され、ベルリンの壁もなくなった。その後の経緯は日々のニュースで目にし、耳に入ったものであるが、数年経って訪れた旧東ドイツはまだまだ貧しかった。西側に追いつけ、という思いはあるものの経済的にはそう簡単に追いつけるものではない。それでも同じ民族・国民であるから、生活や文化、歴史は共有しあえるのである。古いものを大切にする、このことは旧西ドイツも東ドイツもそして現在も同じであった。1996年にフレーベル縁りの地、Bad Blankenburgを中心に滞在したのだが、道路の舗装工事があちらこちらでなされていた。また以前所有していた建物が元の持ち主に戻りその保守管理、維持の問題で廃虚同然のところもあったし、商店街のお店の商品の数が少なく日本の幼稚園や教会のバザー会場以下、と感じたところもあった。

### 3. 『同じ人に育てられること』

#### 『家庭の代理から家庭の延長へ』

1999年に旧東独地方を訪問した時にはかなり街が整えられていて、古い建物と近代建築とが立ち並んでいた。人々の生活も西側と変わらないと感じた。Eisenachの市立幼稚園では室内がきれいに整えられていて、園庭も幼児用と乳児用に区切られており、その中で元気に遊んでいる子ども達や保育者の姿を見ることができた。幼稚園を見学した後に必ず質疑応答の時間があるのだが、その中でこの園長先生は『保育者は子どものよきパートナーであってほしい。目的を持って遊んでほしい』といわれた。ドイツの保育者は子どもを見守るのが仕事、とっていた筆者には驚きとともに大変新鮮な言葉として受け止めた。2000年に訪問したMarburgの市立幼稚園の園長先生は、同じ園に37年間勤務しており、『子どもにとって母親が変わらないのと同じように、幼稚園でも担任は変わるべきではない。』といわれた。学年が変わる度に色々な先生にみてもらうことの効果を強調していた幼稚園に勤務していた筆者には前年同様に忘れられない言葉である。2001年にもEisenachの同じ幼稚園を訪問したのだが、園長先生は『幼稚園は家庭の代理ではなく、延長であることが望ましい。』といわれ、その園も家庭の延長を目指していると話された。

### 4. 最近のドイツの幼稚園の特徴

最近のドイツの幼稚園には公立幼稚園もシュタイナー幼稚園も子どものサイズのキッチンが備えられているところが多い。実際にクッキーやケーキ、パンを焼いたり、昼食を作ることもあるそうだ。また保育室そのものの四隅が直角（正方形、長方形）ではなく、歪んだ五角形であったり、カギ型だったり、ロフトを設置している園もあった。天井が高い分、天蓋を設けて子ども達が落ちていて過ごせる場所も整えてあった。ソファがあり、棚やテーブルの上にちょっとした花が活けられてあったり、壁に観葉植物が葉をのばしていたり、園児の作品の展示の仕方、保育者の手による壁面構成など室内装飾に対する手のかけ方などセンスは日本とは違う。幼児は縦割りクラスの編成で、担任は複数である。そして室内、園庭でのあそびがしっかり分けられている。

### 5. 「保育環境」から連想するもの

「保育環境」という言葉から我々関係者はまず何

を思い浮かべるだろうか。園庭を中心とした自然環境、教職員・保育者という人的環境、施設・遊具・教材などの物的環境、また子どもにとっては家庭も大事な生活環境である。いろいろあると思うが、いずれも保育環境である。大切なことはこれらの環境が子ども達の益になっているかどうか、ということではないだろうか。

生活と遊びを通して子ども達は成長発達していくものであるが、日本の幼稚園はもっと先になってから指導してもいいことが優先され、今しかできないことが見逃されてはいないだろうか。保育行事重視の保育展開が保育ではないはずである。

#### おわりに

日本でもドイツでもそれぞれの園は子どもの健全な成長発達のために保育を展開している。最近の日本の幼稚園は「ちょっと気になる子ども」「気になる親」が目立ち、そのまま進学して「学級崩壊」「非行」などの問題が後をたたない。保育者の資質はもとより、経営者の手腕、保護者の指導など改めてその意義や方法について考えなくてはならないことがたくさんあるように思えてならないのである。

本研究はまだ序の段階である。勤務校の学生の実習に伴って、毎年数十園の幼稚園や保育園を訪問・見学しているが、『遊び』や子どもの発達の捉えかた、保育の目標など、改めて考えたいと思うものである。

今回は報告が中心になってしまったが、今後も幼稚園における保育の展開などに関して、実際に保育の現場に足を運びながら追求していきたい。

#### 参 考

- (1) 特に時間をかけて滞在した地  
Dusseldorf, Meerbusch, Willingshausen, Eisenach, Kassel, Göttingen, Marburg など
- (2) 資 料
1. 『「幼稚園」発展に関する日米比較考察』 1996.9  
東洋英和女学院大学大学院修士論文
2. 学報めじろ「フレーベルの生涯と業績を訪ねて」 1997,2
3. 紀要第4号「フレーベルの幼稚園教育に関する一考察」  
1998,1
4. 学報めじろ「海外研修報告」 1999,12
5. 学報めじろ「海外幼児教育研修に参加して」 1999,12  
以上、東京教育専門学校発行
6. 幼児造形教育研究会「ドイツの保育から学ぶ」 2001.8  
1.～4. 嶋原晶子  
5. 若杉絢子